

北方中国の古代社会に対する考古学研究 —鬲形土器の製法を中心に—

黄川田 修

台湾（中華民国）・国立台南藝術大学藝術史学系 兼任助理教授

1. 本研究の背景と目的

紀元前20世紀から8世紀にかけて、黄河中流域を中心に東アジア最初の青銅器文明が誕生し、独自の発展を遂げた。従来「夏殷周」と称されてきた当該時代を、今日では“中国初期王朝時代”と呼ぶ慣習が1990年代以来定着しつつある。

初期王朝時代の中国社会について、これまで歴史学・考古学などさまざまな分野から多くの研究が進められた。特に20世紀後半の中国考古学界を代表する研究者たち、李濟（台湾大学教授）、張光直（ハーバード大学教授）、鄒衡（北京大学教授）が遺した諸著作は重要である¹⁾。彼らの論点を概括すれば、以下のようになる。「古文献に記された夏・殷・周の各王朝は決して同地域で興った王朝ではなく、近接した、しかしそれぞれ異なる文化・歴史的地盤を持った社会であった。そして当時の中国社会は、大陸各地の多様な社会が中原の王朝を中心として、ゆるやかな統合へと向かいつつあった。」彼らの見解は21世紀の現在、すでに学界の定説となっている。

本研究はこのような背景に基づき、黄河流域を中心とする北方中国においてどのように中国文明が発達したのか、その過程に新たな視点から考察を試みたものである。具体的には、前26世紀から前5世紀にかけて、モンゴル高原南部から黄河中下流域、長江中下流域にかけて幅広く分布した日常用具、鬲形土器（れきがたどき：三つの中空の脚部を持つ、煮炊き用途とする土器）を主要な材料として、主に製法を中心として材料収集・考察を行った。この形状の土器は、殷王朝や周王朝の主要な遺跡で必ず大量に出土するが、これまでの研究の多くは、数人の研究を除き、その形状に対する概略的な考察にとどまっているのが実情であり、社会史や技術史の観点から行った研究はきわめて少数に限られている。本研究では過去の関連著作を参照しつつ、これら鬲形土器の実物資料の観察を通して初期王朝時代初期の各地域間の

交流について考察を試みた。

以下、実際に行った研究活動について述べる。この一年間に行った主要な研究活動は、主に①内モンゴル自治区出土資料に対する現地調査および遺物研究、②日本国内の博物館収蔵品に対する調査、以上二つにまとめられる。次節以下、各項目について調査経過の概要、そして現状での主要成果について簡略に述べてみたい。

2. 中国内モンゴル自治区における遺跡踏査および遺物研究

筆者は2013年の夏に内モンゴル自治区で鬲形土器の実物および出土地の調査を行った。以下に本調査の日程を簡条書きしておく。

- 8月26日 飛行機で名古屋より北京へと移動。
- 8月27日 飛行機で北京より内モンゴル自治区フフホト（呼和浩特）市へと移動。
- 8月28日 内蒙古博物院にて鬲形土器および関連する遺物の調査（第一日）。
- 8月29日 烏蘭察布市涼城県にて老虎山遺跡および園子溝遺跡を踏査。
- 8月30日 烏蘭察布市涼城県にて王墓山遺跡を踏査。
- 8月31日 内蒙古博物院にて鬲形土器および関連する遺物の調査（第二日）。
- 9月 1日 飛行機でフフホトより北京へと移動。
- 9月 2～4日 北京市の中国社会科学院および専門書店にて研究資料の収集。
- 9月 5日 飛行機で北京より名古屋へ帰着。

フフホト市は内モンゴル自治区の区都であり、このフフホト市の東南部に「岱海」と呼ばれる内陸湖がある（図1）。この岱海を中心とする盆地に対し、1980年代より地元の内蒙古考古研究所（以下、内蒙考古所と記す）を中心として組織的な考古学調査が進められ、1990年代に入ってから多くの報告書が刊行され、中国内外の研究者の注目を集めている。



図1 内モンゴル自治区呼和浩特（フフホト）市および岱海の位置

『中華人民共和国分省地図集』掲載の中国北方地形図を引用

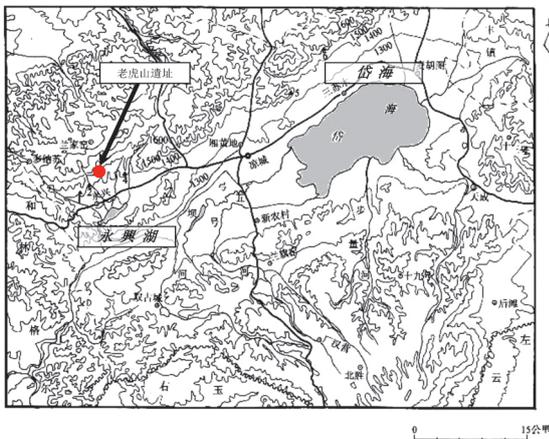


図2 岱海および涼城県老虎山遺跡位置

『岱海考古（一）』掲載地図を一部改変の上で引用

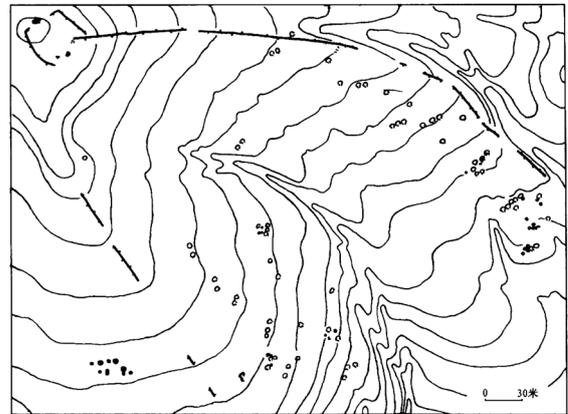


図3 老虎山遺跡平面図

『中国先秦城市考古学研究』より引用

老虎山遺跡は、この岱海周辺で発見された多くの先史遺跡の一つであり（図2）、すでに正式の発掘報告書が公表されている²⁾。上記の日程表に記したように、8月28日および29日の遺跡踏査では、老虎山遺跡の他にも園子溝、王墓山の両遺跡も訪れているが、本報告文では紙幅に限りがあるため、以下では最も重要な遺跡として老虎山遺跡にのみ焦点を絞り、同遺跡の学術的な重要性、そして今次踏査の概略について述べてみたい。

老虎山遺跡は、岱海北方に連なる山脈の南麓に位置する遺跡である。本遺跡は1982年から86年にかけて内蒙考古所により発掘調査が行われ、紀元前2,500～2,300年頃の集落が確認された³⁾。特に注意すべきは、この集落遺跡が急斜面に築かれ、周囲に石を積み重ねた、「石牆」(shi2-qiang2/せきしょう)と呼ばれる構築物が見られることである（図3）。許宏氏が述べているように⁴⁾、東北アジアに最初期の「大型集落」あるいは「都市」が出現した時代の、重要な遺跡の一つとして広く学界の注

目を集めている。また拙論で紹介したように⁵⁾、近年の中国国内では多数の研究者が、中国最古の鬲形土器が、本遺跡および岱海周辺一帯で出土したものと認識している。つまり、老虎山遺跡は「都市」という共同体が出現する前後の東北アジアの社会を知るうえできわめて重要な遺跡であるだけでなく、加えて鬲形土器の誕生の社会背景を知るうえで大きな意味を持っているのである。

2013年8月29日、筆者は内蒙考古所から紹介された地元の専門家C氏の車に乗り、フフホト市内を出発して老虎山遺跡に向かった。午後、遺跡所在地に到着し、山の麓より遺跡周辺の地形を確認。まず、思った以上の急勾配の地形に驚かされる。中国側発表の地形図には等高線に具体的な数値が記されておらず、遺跡周辺の立体感覚がつかみにくかったが（図3）、実際の遺跡はかなりの勾配角をもつ地形の上に位置している（図4）。山麓に到着すると、車が通れる道は途切れていたため、あとは自力で登っていくしかない。C氏の説明を聞いたあと



図4 老虎山遺跡遠景

2013年8月29日 撮影方向：東→西



図5 老虎山遺跡石碑の横に立つ筆者

2013年8月29日撮影



図7 老虎山遺跡東側石牆および遺跡東部遠景

2013年8月29日 撮影方向：西→東



図6 老虎山遺跡東側石牆現状

2013年8月29日 撮影方向：東→西



図8 老虎山遺跡東側石牆北側より永興湖（画面矢印）を望む

2013年8月29日 撮影方向：北→南

一人で登山を開始（図5～7）。約40分かけて登ってゆき、山頂まで標高差20 mほどの地点まで到達したのだが、強風のため滑落の危険があると判断し、登山を中断

して下山した。引き返した地点から山麓を見ると、永興湖および周辺のなだらかな、緑の美しい山々が一望のもとに見渡せ、風景のあまりの見事さに我を忘れるほどであった（図8）。

上記の遺跡見学のほか、8月28日および31日にはフフホト市内の内蒙古博物院を見学し（図9）、同院で展示されている老虎山遺跡出土の鬲形土器（図10）、および関連する遺物の調査を行った。以前より、内蒙考古所



図9 内蒙古博物院正面入口遠景

2013年8月28日 呼和浩特市市内にて撮影



図10 内蒙古博物院所蔵 老虎山遺跡出土高形土器

2013年8月28日 同院展示室にて撮影

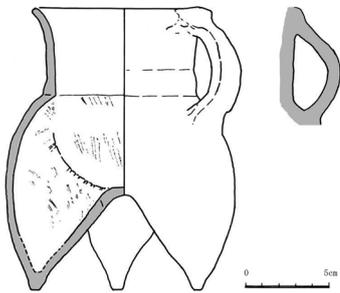


図11 東京国立博物館所蔵高形土器（一）
（陝西龍山文化）実測図

2013年8月19日 同館にて黄川田が作成



図12 東京国立博物館所蔵高形土器（一）器影

2013年8月19日 同館にて黄川田撮影

が公表した写真や実測図で主要な特徴は理解していたが、実物の観察により細部を自身の眼で確認できたことは、今後の研究のうえできわめて有用であった。

3. 日本国内の博物館収蔵品に対する調査

内モンゴルへ旅立つ直前、東京国立博物館（8月19日）および京都大学附属総合博物館（8月23日・24日）において、北方中国出土の高形土器に対して実測図作成、写真撮影を行った。

図11～14は東京国立博物館所蔵、図15～19は京大博物館所蔵の資料である。正式な発掘によって出土したものではないが、全てモンゴル高原周辺部から陝西省一帯にかけて出土した、前26世紀から6世紀ころにかけての遺物であり、高形土器誕生期の情報を知るうえで重要な資料であると言える。

4. 今後の課題

この一年間、上記二項目の研究作業以外にも、筆者

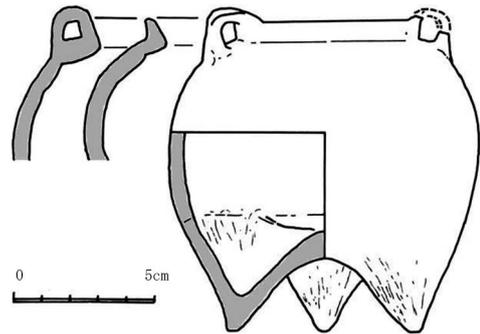


図13 東京国立博物館所蔵
高形土器（二）（夏家店上層文化）実測図

2013年8月19日 同館にて黄川田作成



図14 東京国立博物館所蔵
高形土器（二）器影

2013年8月19日 同館にて黄川田撮影

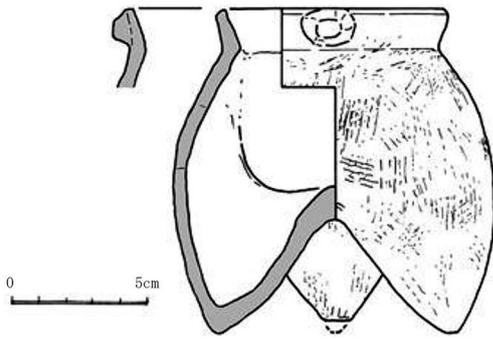


図15 京都大学総合博物館所蔵
鬲形土器（一）（夏家店上層文化）実測図
2013年8月23日 同館にて黄川田作成

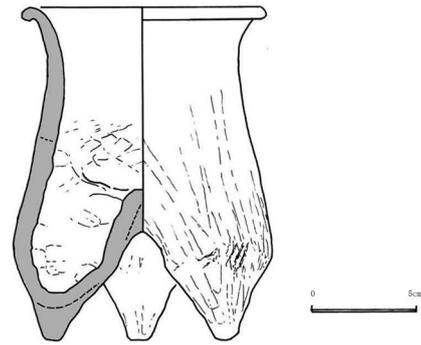


図17 京都大学総合博物館所蔵鬲形土器（二）
（夏家店下層文化）実測図
2013年8月23日 同館にて黄川田作成



図16 京都大学総合博物館所蔵
鬲形土器（一）実測図
2013年8月23日 同館にて黄川田撮影



図18 京都大学総合博物館所蔵
鬲形土器（二）器影
2013年8月23日 同館にて黄川田撮影

は過去数年間に台北の中央研究院において作成した、河南省殷墟遺跡出土の鬲形土器（紀元前13～10世紀）の実測データの整理も実施した。紙幅に限りがあるため、本報告ではこの作業の成果については以下の2点のみを挙げるにとどめる。

(1) 過去の李濟、蘇秉琦らの研究、実物の観察結果を総合すると、殷墟の鬲形土器の製法は四種に分類することができる（図20）。

(2) 1930年代に中村清兄氏が指摘したように⁶⁾、このうち甲一類がもっとも古い技法であり、続いて甲二類と乙類が出現し、最も遅れて出現したのが丙類であると想定できる。

以下、この一年間の研究成果を踏まえ、今後の研究課題について述べたい。筆者が殷墟の鬲形土器の分析から導き出した製法の分類は、おそらくモンゴル高原、満洲、華北それぞれの前3～1千年紀の鬲形土器全てに適用できる可能性がある。一例を挙げれば、筆者が甲一類



図19 京都大学総合博物館所蔵
鬲形土器（二）脚部
2013年8月23日 同館にて黄川田撮影

と呼ぶ技法、すなわち三足をそれぞれ別個に作り、最後に脚部上部で合成する方法（図20）は、老虎山遺跡（図10）や、陝西省の龍山文化期（図11、12）、モンゴル高原東部の夏家店下層文化期（図17～19／前20～14世紀）に広く見られる。一方で、甲一類を簡略化した技法であ

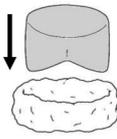
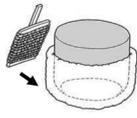
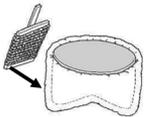
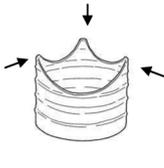
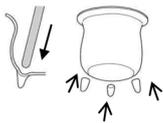
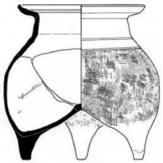
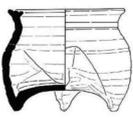
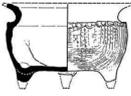
	甲一類	甲二類	乙類	丙類
製造過程一				
製造過程二				
完成品				

図20 殷墟出土鬲形土器の製法の分類

る甲二類もまた、殷墟だけではなく、モンゴル高原東部から満洲南部一帯の夏家店上層文化の資料中に認められる(図13~16/前11~7世紀)。この現象を偶然と見るべきか、それとも何らかの社会的背景の産物と見なすべきなのか。資料不足のため、筆者にはいまだ具体的なアイデアを提示することができない。ただその一方で注意すべきは、この時期の東北アジアの社会が、それまでの「地域間交流」の枠組みを超え、黄河・長江両大河の流域の諸地域を中心にゆるやかな統合に向かっていき、やがて「中国」という巨大な文明圏の形成につながってゆく、という事実である⁷⁾。この歴史の流れは、上記の鬲形土器の製法の広がりを考えるうえで、無視できぬ重要な社会背景である。あるいは、鬲形土器の誕生と急速な普及は、上記に述べたような、当該時期の地域間の物資・人・情報の流通量の急増と何らかの関連があるのかもしれない。今後は、鬲形土器の使用方法にも注目し、研究を継続していきたい。

謝 辞

本報告に述べた諸成果については、公益財団法人三島海雲記念財団からの研究助成を得た。この場を借りて

御礼申し上げたい。また、資料調査にあたっては下記の方々のご協力を得た。関係各位に謹んで感謝の意を表したい。川村佳男(東京国立博物館) 菊地大樹(奈良文化財研究所) 陳光祖(中央研究院史語所) 張文平(内蒙考古所) 村上由美子(京都大学総合博物館)(五十音順・敬称略)

文 献

- 1) (a) C. Li (李濟): The Beginnings of Chinese Civilization: Three lectures illustrated with finds at Anyang, University of Washington Press, 1958. (b) K. Chang (張光直): The Archaeology of Ancient China 4th ed., New Heaven: Yale University Press. (c) 鄒衡: 夏商周考古学論文集, 文物出版社, 1980.
- 2) 内蒙古文物考古研究所: 岱海考古(一)—老虎山文化遗址発掘報告集一, 科学出版社, 2000.
- 3) 内蒙古文物考古研究所: 岱海考古(一)—老虎山文化遗址発掘報告集一, pp. 199-206, 科学出版社, 2000.
- 4) 許宏: 先秦城市考古学研究, 北京燕山出版社, 2000.
- 5) 黄川田修: 東亜陶鬲研究之省思—以製法及相關問題为中心—, 三代考古, 第4集, pp. 26-46, 科学出版社, 2011.
- 6) (a) 中村清兄: 考古学, 6(4), 188-197, 1935. (b) 中村清兄: 考古学, 6(5), 222-234, 1935.
- 7) 西江清高: 先史時代から初期王朝時代, 世界歴史大系中国史1 先史~後漢(松丸道雄等編), pp. 3-102, 山川出版社, 2003.